参考

・「太宰治全集」第六巻　（十二月八日）　筑摩書房　平十

けふの日記は特別に、ていねいに書いて置きませう。昭和十六年の十二月八日には日本のまづしい家庭の主婦は、どんな一日を送つたか、ちよつと書いて置きませう。もう百年ほど経つて日本が紀元二千七百年の美しいお祝ひをしてゐる頃に、私の此の日記帳が、どこかの土蔵の隅から発見せられて、百年前の大事な日に、わが日本の主婦が、こんな生活をしてゐたといふ事がわかつたら、すこしは歴史の参考になるかも知れない。だから文章はたいへん下手でも、嘘だけは書かないやうに気を附ける事だ。なにせ紀元二千七百年を考慮にいれて書かなければならぬのだから、たいへんだ。でも、あんまり固くならない事にしよう。主人の批評に依れば、私の手紙やら日記やらの文章は、ただ真面目なばかりで、さうして感覚はひどく鈍いさうだ。センチメントといふものが、まるで無いので、文章がちつとも美しくないさうだ。本当に私は、幼少の頃から礼儀にばかりこだはつて、心はそんなに真面目でもないのだけれど、なんだかぎくしやくして、無邪気にはしやいで甘える事も出来ず、損ばかりしてゐる。慾が深すぎるせゐかも知れない。なほよく、反省をして見ませう。（略）

十二月八日。早朝、蒲団の中で、朝の仕度に気がせきながら、園子（今年六月生れの女児）に乳をやつてゐると、どこかのラジオが、はつきり聞えて来た。

「大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。」

しめ切つた雨戸のすきまから、まつくらな私の部屋に、光のさし込むやうに強くあざやかに聞えた。二度、朗々と繰り返した。それを、じつと聞いてゐるうちに、私の人間は変つてしまつた。強い光線を受けて、からだが透明になるやうな感じ。あるひは、聖霊の息吹きを受けて、つめたい花びらをいちまい胸の中に宿したやうな気持ち。日本も、けさから、ちがふ日本になつたのだ。

隣室の主人にお知らせしようと思ひ、あなた、と言ひかけると直ぐに、

「知つてるよ。知つてるよ。」

と答へた。語気がけはしく、さすがに緊張の御様子である。いつもの朝寝坊が、けさに限つて、こんなに早くからお目覚めになつてゐるとは、不思議である。芸術家といふものは、勘の強いものださうだから、何か蟲の知らせとでもいふものがあつたのかも知れない。すこし感心する。けれども、それからたいへんまづい事をおつしやつたので、マイナスになつた。

「西太平洋つて、どの辺だね？　サンフランシスコかね？」

私はがつかりした。主人は、どういふものだか地理の知識は皆無なのである。西も東も、わからないのではないか、とさへ思はれる時がある。つい先日まで、南極が一ばん暑くて、北極が一ばん寒いと覚えてゐたのださうで、その告白を聞いた時には、私は主人の人格を疑ひさへしたのである。（略）

「西太平洋といへば、日本のはうの側の太平洋でせう。」

と私が言ふと、

「さうか。」と不機嫌さうに言ひ、しばらく考へて居られる御様子

で、「しかし、それは初耳だつた。アメリカが東で、日本が西といふのは気持の悪い事ぢやないか。日本は日出づる国と言はれ、また東亜とも言はれてゐるのだ。太陽は日本からだけ昇るものだとばかり僕は思つてゐたのだが、それぢや駄目だ。日本が東亜でなかつたといふのは、不愉快な話だ。なんとかして、日本が東で、アメリカが西と言ふ方法は無いものか。」

おつしやる事みな変である。主人の愛国心は、どうも極端すぎる。（略）

夕刊が来る。珍しく四ページだつた。「帝国・米英に宣戦を布告す」といふ活字の大きいこと。だいたい、けふ聞いたラジオニユウスのとほりの事が書かれてゐた。でも、また、隅々まで読んで、感激をあらたにした。

ひとりで夕飯をたべて、それから園子をおんぶして銭湯に行つた。ああ、園子をお湯にいれるのが、私の生活で一ばん一ばん楽しい時だ。園子は、お湯が好きで、お湯にいれると、とてもおとなしい。お湯の中では、手足をちぢこめ、抱いてゐる私の顔を、じつと見上げてゐる。ちよつと、不安なやうな気もするのだらう。よその人も、ご自分の赤ちやんが可愛くて可愛くて、たまらない様子で、お湯にいれる時は、みんなめいめいの赤ちやんに頬ずりしてゐる。園子のおなかは、ぶんまはしで画いたやうにまんまるで、ゴム鞠のやうに白く柔く、この中に小さい胃だの腸だのが、本当にちやんとそなはつてゐるのかしらと不思議な気さへする。そしてそのおなかの真ん中より少し下に梅の花の様なおへそが附いてゐる。足といひ、手といひ、その美しいこと、可愛いこと、どうしても夢中になつてしまふ。どんな着物を着せようが、裸身の可愛さには及ばない。お湯からあげて着物を着せる時には、とても惜しい気がする。もつと裸身を抱いてゐたい。

銭湯へ行く時には、道も明るかつたのに、帰る時には、もう真つ暗だつた。燈火管制なのだ。もうこれは、演習でないのだ。心の異様に引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか。こんな暗い道、今まで歩いた事がない。（略）女学校四年生の時、野澤温泉から木島まで吹雪の中をスキイで突破した時のおそろしさを、ふいと思ひ出した。あの時のリユツクサツクの代りに、いまは背中に園子が眠つてゐる。園子は何も知らずに眠つてゐる。

背後から、我が大君に召されえたあるう、と実に調子のはづれた歌をうたひながら、乱暴な足どりで歩いて来る男がある。ゴホンゴホンと二つ、特徴のある咳をしたので、私には、はつきりわかつた。

「園子が難儀してゐますよ。」

と私が言つたら、

「なあんだ。」と大きな声で言つて、「お前たちには、信仰が無いから、こんな夜道にも難儀するのだ。僕には、信仰があるから、夜道もなお白昼の如しだね。ついて来い。」

と、どんどん先に立つて歩きました。

どこまで正気なのか、本当に、呆れた主人であります。